

第9回極東選手権競技大会における 英領インド選手団代表旗問題

—— 新聞報道を手がかりとして ——

富田 幸祐 (一橋大学大学院博士後期課程)

Flag Incident in the ninth Far Eastern Championship Games An analysis based on newspapers

TOMITA Kosuke (Graduate School of Social Science, Hitotsubashi University)

Abstract

The purpose of this study is to clarify British India national flag incident which occurred during the ninth Far Eastern Championship Games (FECG), and also to examine its historical meaning.

The flag incident is an incident that the Indian national team raised the Gandhi's flag which is a symbol of the Indian independence movement from British rule, although the British side required the Indian team to display the Flag of the Governor-General of India. After the incident happened, it was reported in a number of newspapers. Whilst the Japanese newspapers mentioned that the confrontation between the two countries was resolved by using the Flag of the Governor-General of India, the English newspapers reported that both flags were raised on the roof of Nihon Seinenkan where the Indian team stayed during FECG. Even though there was some confusion over which flag was chosen, in actual fact both flags were raised. In addition, the Indian team appeared in the closing ceremony, holding both the Flag of the Governor-General of India and the Gandhi's placards. Moreover, not only the Indian team, but also Indians living in Japan and the Japan National Party (Nihon Kokumintou) were involved in the incident. The flag incident and placards express the Indian team's dilemma over their independence and sports.

1. はじめに

極東選手権競技大会（以下極東大会）とは、1913年～1934年にかけて開催された戦前のアジアにおける地域的国際スポーツ大会である。その第9回大会が、1930年に東京の明治神宮外苑を舞台として行われた。大会は5月24日～31日まで1週間の日程で挙行され、開催国である日本が中国、フィリピンそして大会初参加の英領インド（以下インド）¹⁾を抑えて、通算4回目の総合優勝を成し遂げた。

第9回大会において極東大会では初めて、全参加国の選手が同じ宿舎に寄宿をすることとなった²⁾。その寄宿舎とは明治神宮外苑にある日本青年館であり、日本青年館が発行する『日本青年新聞』では、参加した4か国の選手が、食堂やロビー、廊下といった場面で国際交流を図る様子や、外国人選手が慣れない日本での生活に戸惑う様子などが紹介されている。そうした記事と並んで、ある一つの出来事が紹介されている。

青年館の屋上高く日、中、比、印の四国旗

が外苑の空を圧する。印度の旗にはものいいづきで、最初の三色旗〔ガンディー旗—引用者注〕が下されて、英国自治領旗〔英領インド旗〕の旗が、

「俺が代表するんだイツ」

日の丸の旗と、青天白日旗と、星の入った比律賓の旗、英国国旗の中に王冠のしるしのついたのが、各々お国を代表して深緑の森に映えるさまは一寸詩的だ！³⁾

この記事が伝えるのは、日本青年館の屋上に元々掲揚されていたインド選手団の代表旗である三色旗〔ガンディー旗〕が、「ものいい」によって英領自治領旗〔英領インド旗〕へと変更されたということである。この三色旗というのは、第9回大会が開催されていた同時期にインドで活発化していたインド独立運動において、マハトマ・ガンディー等によって掲げられたガンディー旗のことを指す。なぜガンディー旗は日本青年館の屋上に掲揚されたのか。本研究は第9回極東大会で発生したインド選手団によるガンディー旗と英領インド旗の掲揚をめぐる問題（以下代表旗問題）を、主に新聞報道を手がかりとしてインド選手団および関係者の行動を追跡し、極東大会におけるその歴史的意義を明らかにすることを目的とする。

尚、以下ではインド選手団が掲揚しようとした旗を「ガンディー旗」、本来掲揚されることとなっていた旗を「英領インド旗⁴⁾」と引用文中を除いて名称を統一する。

極東大会に関する先行研究は、まず概説的なものとして、小林による極東大会がもたらした日本のスポーツ界への影響を論じたものや、阿部によるIOC所蔵資料を用いての研究がある⁵⁾。特に阿部は本研究で扱う代表旗問題に関してもわずかながら言及しており、第9回極東大会終了後にイギリスオリンピック委員会とインドオリンピック委員会・大日本体育協会（以下体協）の間で、代表旗問題に関して主に事実関係を巡ってやり取りが行われたことをIOC所蔵資料に拠って明らかにし

ているが、代表旗問題自体がいかなるものであったのかについての検討はなされていない。

第8回上海大会に参加した日本指導者の言説を分析し、その背景に同時代の日本のアジア進出があることを明らかにした伊達、上海で開催された第2回、第5回、第8回大会に焦点を当て極東大会を「国家行事の場」と捉えた孫、第10回大会満洲国参加問題に対する中国の新聞『申報』の報道を分析した何は、それぞれ極東大会における日中関係を論じている⁶⁾。

池井は満洲国の誕生から、満洲国体育協会の成立と極東大会への参加の希望、体協による積極的な参加承認活動を主に体協史料に依拠して分析している⁷⁾。

こうした研究に対し、高嶋は「極東スポーツ界」という概念を用い、日本だけではなく中国やフィリピン、そして満洲国の状況をも含めた東アジア全体を捉えた議論が行われるべきだとし、中国やフィリピンの史料も使いながら、包括的に分析することによって「極東スポーツ界」の実像を浮かび上がらせ、それが東亜新秩序の下で再編されていく過程を詳細に描き出している⁸⁾。

極東大会の実態は日本、中国、フィリピンによる3ヶ国対抗競技大会であったため、当然のことながら先行研究の関心もこの3国に集中している。しかしながら極東大会は「日中比競技大会」ではなく、「極東大会」であり、本来ならばこの3国に止まらず、もっと広範な地域から参加国を招いた東アジアの競技大会と発展すべきものであったはずである。なぜ極東大会の参加国が拡大しなかったのか。本論文の問題関心はこの点にある。つまり3ヶ国以外での選手権種目初参加⁹⁾となるインドの事例は、極東大会への参加国が初めて4ヶ国へと拡大したということだけでなく、日本以外の国々が植民地ないし半植民地であったアジアという地域で行われた国際競技大会が、持たざるを得なかった障壁を浮き彫りにすることができると考えられるからである。

主な史料としては、外務省外交史料館に所蔵される『極東「オリムピック」競技大会関係一

件』と各種新聞を使用する。代表旗問題は多くの新聞で報道がされたが、どの新聞もほぼ断片的な情報に止まっており、また新聞の報道ではインド選手団や在日インド人、イギリス大使館等々が様々な立ち位置で表れ、代表旗問題の実情を混沌とさせている。代表旗問題の発生、解決を報道した新聞は管見限りでは『東京朝日新聞』、『東京日日新聞』、『大阪朝日新聞』、『日本』の4紙であった¹⁰⁾。そこで、この4紙と関係者からのコメントを掲載した英字新聞のTHE JAPAN CHRONICLEとTHE JAPAN ADVERTISERを中心に、その他にも代表旗問題関連の記事が掲載された新聞も適宜使用しながら考察を進めていく。

2. インドの極東大会参加

第9回大会がインドにとって初めての参加であったが、1921年に開催された第5回大会での総会から、インドの参加についての議論は行われていた¹¹⁾。1927年に上海で開催された第8回大会の前には主催団体¹²⁾である中華民国体育協進会が体協にインドから参加要望があったことに対して意見を求めた。この時体協は条件付きでの参加を認めている¹³⁾。このことは『東京朝日新聞』にも掲載され、陸上競技に8名のインド選手が参加予定であると報道されたが¹⁴⁾、実際に第8回大会へのインドの選手派遣は行われず大会不参加に終わっている。この第8回大会中に開催された極東総会では、再度インドの参加に関して協議が行われ、総会ではインドを含めたいくつかの国々に第9回大会の招待状を送付することが決議された¹⁵⁾。

1930年に東京で開催される第9回大会の主催団体である体協は、1929年12月20日の専務理事会において、中国とフィリピンの他にインド、タイ、蘭領東インドに招待状を送付することを決議する¹⁶⁾。しかしこの招待状に対する返答は中国、フィリピン以外の国からは送られてくることはなかったようである。年が明けて1930年、極東大会に関する会議は体協の専務理事会から極東協会の

総務委員会に移行され¹⁷⁾、2月27日の第7回総務委員会でインドから極東大会参加の要請があったことが明らかとなった。この時、参加を要請したのは当初招待状を送付したインドオリンピック協会ではなく、カルカッタ¹⁸⁾に在るインドベンゴールオリンピック協会であった。総務委員会ではインドベンゴールオリンピック協会の参加を認めることとし、先に招待状を送付してあるインドオリンピック協会に参加の了承をとるようにとインドベンゴールオリンピック協会に連絡することを決定した¹⁹⁾。インドからの参加表明はあったが、この後インドからの連絡は途絶え、総務委員会でも議論されることはなかった。

インドベンゴールオリンピック協会からの参加要請から2か月余りが過ぎた5月2日、第16回総務委員会でインド選手団がすでにインド本国を出発していることが報告された²⁰⁾。この報告の段階では何人の選手が来るのか、どの競技に参加するかといった詳細は一切不明の状態であったが、インドから砲丸投げとハンマー投げの日本記録に対しての問い合わせがきていたので、参加選手は陸上選手ではないかと考えられていた²¹⁾。最初にインドに招待状を送付してから約半年、第9回大会開催まで1か月をきるなか、インド選手団の第9回大会参加は決定した。

インド選手団がいつインドを出発したのかは定かではないが、5月7日に上海²²⁾、5月9日には門司²³⁾を経由して5月10日に神戸に到着する²⁴⁾。神戸では神戸在住のインド人から歓迎を受け、その日の夜にインド独立運動家であるA・M・サハーイ等に見送られて、三宮駅から急行に乗り東京へと向かった²⁵⁾。インド選手団は、門司と神戸でインタビューを受けており極東大会初参加の喜びと、スポーツを通じた国際交流への期待を述べている²⁶⁾。またこの時になって初めてインド選手団の全貌も明らかとなった。インド選手団は総勢5名で、監督のS・K・ムカジーの他に、A・ハミッド、M・サットン、A・ユスフの3人の選手と、アシスタントとしてD・R・サリーを共だっていた。この中でインド選手団の主将を務

めるハミッドは1928年に開催されたアムステルダムオリンピックにインド代表として出場している²⁷⁾。

東京到着後のインド選手団の動きについては『アスレチックス』が詳しく取り上げている²⁸⁾。インド選手団は東京に到着すると「直ちに車を外苑競技場に馳せて」、大会会場である明治神宮外苑競技場を視察した。日本青年館への入舎は5月17日であったので、それまでは六本木付近にあった乃木坂倶楽部に宿泊している。また当時早稲田大学競走部の主将であり、1928年のアムステルダムオリンピックの三段跳で金メダルを獲得した織田幹雄との面会を要望し、後日合線で練習を行っている。また織田を共だつて美津濃運動具店にも出かけており、この時、訪れた美津濃運動具店ではお茶やお菓子を薦められたが「トレーニングしているから」と断りを入れたという。「極東親善の目的の為」だけではなく、技術の向上にも積極的なインド選手団の様子が窺える。東京到着2日目にはR・B・ボースのいる中村屋に赴き、食事をとっている。そこで出されたものは当然「第一の御馳走」カレーであった。

インド選手団と共に練習をした織田幹雄は、戦後に著した回想録『跳躍一路』の中でインド選手団についてわずかではあるが言及をしている。

[インド選手団は] 遠来の客であり、また

ハミッド君の茶目振りが面白く人気ものとなつた。

ハミッド君は、西田修平君の着物を借りて着込み、競技場に乗り込んだので、写真班のとりこになつた²⁹⁾。

ここでは日本の選手団と混じり、陽気に振る舞うハミッドの思い出が語られている。インド選手団はその他にも21日午後に体協主催のパーティー、22日には上野精養軒での田中隆三文部大臣主催のパーティーに出席し、両パーティーにおいて監督のムカジーによる演説が行われた³⁰⁾。また21日の午後7時25分からのラジオ放送の中ではムカジーが演説を行っている³¹⁾。

3. 極東大会部長会議開催

インド選手団が日本青年館に移動する前日の5月16日、極東大会部長会議が開催された。会議では、インドの第9回大会中に使用する国旗、国歌に関する取り決めがなされ、イギリス大使館に照会をした結果、国旗は「公式の場合、ユニオンジャックの英国旗中に王冠を表はし「ヘブンズ・ライト・アワー・ガイド」と書いたインド国旗〔英領インド旗〕を用いることとし、国歌は「入場式には英国国歌を奏楽しその他の場合にはインド国歌を奏楽するも差支へなし」と決定した³²⁾。

表1. インド選手団プロフィール

名前		年齢	職業	出身大学
S・K・ムカジー	監督	?	YMCA主事(カルカッタ)	?
A・ハミッド	選手(陸上)	24	北西鉄道に勤務。詳細不明。	バンジャープ大学
M・サットン	選手(陸上)	20	火夫(ベンガルーナーグブル鉄道)	?
A・ユスフ	選手(陸上)	23	警察	カルカッタ大学
D・R・サリー	アシスタント	?	?	?

THE JAPAN CHRONICLE, SUNDAY, MAY 11, 1930、大日本体育協会編『第九回極東選手権競技大会報告書』1930年、織田幹雄『跳躍一路』日本政経公論社、1956年を基に作成。

表2. インド選手団出場競技種目一覧

	100m	200m	110mh	200mh	走高跳	走幅跳	五種競技	十種競技
A・ハミッド	○		○	○		○		○
M・サットン	○	○				○	○	
A・ユスフ					○	○		

大日本体育協会編『第九回極東選手権競技大会報告書』1930年を基に作成。

このインドの極東大会で使う国旗・国歌³³⁾について事前に話し合いが行われた背景には、1930年前後のインドにおける独立運動があったことが考えられる。1929年12月、インド北西部のラホールで開催されたインド国民会議派大会でイギリスの打破、インドの完全独立が宣言された。この時にガンディーらインド独立を推進する国民会議派は英領インド旗に代わる、新たなインド民族を表す旗を作成した。それが白・緑・赤の三色に中央に糸車を印したガンディー旗である。このインド国内の動きに対して、日本でインド独立運動の活動をしていたR・B・ボースやA・M・サハイ³⁴⁾が呼応し、彼らインド独立運動家たちは、1930年5月の段階で少なくとも3度のガンディー旗の掲揚式を日本において行っていた³⁵⁾。また大会開催1か月を切った5月6日にはガンディーの逮捕が日本でも報道され³⁶⁾、神戸ではガンディー逮捕の知らせを受けたインド人たちが独立運動激励のために会合を開き、独立運動への確固たる意志を露わにしていた³⁷⁾。一方、この時期の日本とイギリスの関係については、1921年のワシントン会議で、日英同盟は破棄されていたものの、1930年前後は中国における反日、反英運動に対峙する為に協調路線を維持し、1929年にはイギリス王室から使節の来日が実現するなど「通常の友好関係を維持³⁸⁾」していた。わざわざイギリス大使館に極東大会で使用するインド選手団の国旗について問い合わせたのは、インドの独立運動に関連した問題が起きることを、極東大会を主催する体協が

危惧していたことを窺わせる。インドの国旗国歌の件についての話し合いは、こうした問題と極東大会におけるインド選手の参戦の間に一線を画すための予防策であったと考えられる。

極東大会部長会議の翌日の5月17日、夕方にインド選手団は乃木坂倶楽部から日本青年館に移動してきた。この時、日本青年館の屋上には英領インド旗ではなくガンディー旗が掲げられたのである。

4. 代表旗問題の新聞報道

(1) 『東京朝日新聞』による報道

『東京朝日新聞』によれば、インド選手団は日本青年館に到着後、「インド一選手の希望」によりガンディー旗がインド選手団の代表旗として日本青年館屋上に掲揚されていたが、イギリス大使館からの抗議により英領インド旗が掲揚された。しかし今度は日本にいるインド人達が「これに憤慨してインド国旗〔英領インド旗〕とガンヂ旗の取代へを求め」てきたのである。対応に苦慮する日本青年館は英領インド旗をひとまず降納し体協に意見を求めた。その結果体協は「既にインド代表と英国大使館との間で交渉済みのもの故インド国旗を掲ぐべきものである」との見解を明らかにしたので日本青年館は再び「ユニオン・ジャックのインド国旗を掲げる」こととなり、この事態にボースやサバルワルを中心とした在日インド人達が更なる抗議に及ぶのではないかと報道された⁴¹⁾。翌日の『東京朝日新聞』では東京朝日新聞



図1. 英領インド旗³⁹⁾



図2. ガンディー旗⁴⁰⁾

本社にボースらが訪れ声明を発表したことを報道した。だが懸念されていた抗議はなく、今回参加のインド選手は「英国代表選手にして真のインドを代表するものと認むることができない」として、「国旗掲揚問題の如何には触れず」に、インド選手団を「インドを代表する真の選手にあらず」とする趣旨の声明を述べるにとどまった⁴²⁾。

『東京朝日新聞』ではボースの声明のみで記事が終わっているが、同系列である『大阪朝日新聞』にはこの続きが掲載されている。

(2) 『大阪朝日新聞』による報道

『大阪朝日新聞』には『東京朝日新聞』と同様の記事が24日に掲載されたが、続きとしてボースらがなぜこのような見解に至ったのかに関して、カール・シーナという人物のコメントを掲載している。カール・シーナは、極東大会参加のインド選手団は「いづれも印度国民議会のメンバーではなく、彼らが「たとへイギリス旗〔英領インド旗〕を掲げたところで抗議のしようがない」と語った⁴³⁾。つまりインド選手団の立場上、在日インド人達にはインド選手団に対して強硬にガンディー旗の掲揚を強制させるだけの力がないことを示唆し、暗にこれ以上のガンディー旗の掲揚に向けた行動が行われることを否定しているのである。『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』の報道では、日本青年館の屋上にはガンディー旗ではなく英領インド旗のみが掲げられる結果となった。

(3) 『東京日日新聞』による報道

『東京日日新聞』では「日本青年館の屋上に翻つてゐたガンヂーの革命旗はいつしか英国自治領旗〔英領インド旗〕に早代りし」、この事態に「インド選手から抗議起り廿二日の午後は自治領旗は引降ろされ今日は、比、華の三国旗のみとなった、なほ在留インド志士ボース、サバルワルの両氏は廿二日夜日本青年館を訪ひ各会場の装飾に使用してゐる自治領旗を取り払い、ガンヂーの革命旗に代へてほしいと強硬な抗議を申し込んでゐる」と『東京朝日新聞』と同様の報道を述べた後

にインド選手団監督であるムカジーのコメントを掲載している。ムカジーは「自分達は国外まで来てスポーツの場合政治的の争ひまでしたくはないから一切は日本に委せました」と自身の見解を明らかにした⁴⁴⁾。ムカジーはガンディー旗を巡る問題に対して不干渉をアピールし、ガンディー旗の掲揚に対して明言を避けている。翌日の『東京日日新聞』には「廿三日英大使館では印度選手を招き協議した結果、ガンヂー旗はやめて印度自治領旗〔英領インド旗〕を使用することに決し廿四日の入場式には自治領旗を掲げて参列することになった」と報道した⁴⁵⁾。第9回大会開会式を翌日に控えた5月23日にインド選手団は、ガンディー旗ではなく英領インド旗を使用することでイギリス大使館と合意したとしている。つまりインド選手団はガンディー旗の使用を強行しようとはしなかった。つまり先ほどの『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』の記事と重ねたとき、イギリス大使館と話し合いを行い、英領インド旗の使用で再度合意をするインド選手団の姿は、ボースにとって「真のインドを代表するものと認むることができない」ものであった。

以上のように、『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』『東京日日新聞』の3紙の報道を合わせると、一度降納されたガンディー旗が再度日本青年館の屋上に掲げられることはなく、インド選手団は英領インド旗を使うことで合意をし、第9回大会の開会式にも英領インド旗を持って入場することで代表旗問題の決着がついている。そしてボースによるインド選手団に関する声明が発表されていたということになる。続いて英字新聞の検討に移る。なぜなら英字新聞の報道ではガンディー旗の掲揚が認められているからである。

(4) THE JAPAN CHRONICLEによる報道

THE JAPAN CHRONICLE⁴⁶⁾の紙面上では代表旗問題の報道だけでなく、在留インド人であるボースやサハハイといったインド選手団の関係者が投稿を行っていた。

最初の記事は、代表旗問題に対するTHE

JAPAN CHRONICLEの独自の報道と見解を表した記事である。記事では、インド選手団が来日前にインド総督から英領インド旗を受け取り、それを使用することを約束したにも関わらず、ガンディー旗を掲げたことを「汚いやり方」とであると非難し、また神戸にあるThe Indian Sports Clubから体協会長の岸清一にガンディー旗を使用すべきとする抗議が送られたことを報道した⁴⁷⁾。抗議は神戸印度人運動倶楽部名義で岸のもとに送られた。その内容は第9回大会中の、インド選手団の代表旗を英領インド旗ではなくガンディー旗にすることを求めたものであった⁴⁸⁾。この報道に対し、神戸在住のサハライが真っ先に反応し、自身の見解をTHE JAPAN CHRONICLEに投稿し掲載された。サハライは「汚いやり方」とされたガンディー旗の掲揚という行動については詳細を知らないと前置きした上で、「インド選手団にインド民族旗〔ガンディー旗〕を使わせることは政治的な宣伝を意味するのではない」とした。そしてその根拠を第9回大会に参加しているインド選手団に求めている。「インドではアングロ系インド人やクリスチャンそして警察はたいてい反ナショナリストという事実がある」とサハライは語り、今回参加のインド選手団はここに当てはまるという。今回参加のインド選手団の構成上、ガンディー旗には政治的な意味は含まないとの見解をサハライは示したのであった⁴⁹⁾。

この後、ボースもTHE JAPAN CHRONICLEに投稿をしている。ボースは真実を語るとし、代表旗問題の起きた経緯を述べている。ボースの語るところに依れば、インド選手団は日本青年館到着後に、係員から代表旗について問われ、その時に「フィリピンはアメリカ国旗ではなく自らの国旗を掲揚していたので、青年館の屋上にはインド民族の象徴を掲げるべきだ」と考え、ガンディー旗を掲揚するに至ったという。そしてガンディー旗に変わって英領インド旗が掲揚されると「[自分達に対する]大きな侮辱である」と感じ、抗議を行った。その結果、5月23日には「中央に星の入ったユニオンジャック〔英領インド旗〕が

降ろされ、三色旗〔ガンディー旗〕が取って代わり、24日になると「11時ごろに再度ユニオンジャックが三色旗の横に掲揚されセレモニーの間は2つの国旗が掲揚されたまま」になった。そして開会式では「2つの旗を持って」参加し、その「2つの旗」というのは「[India]と書かれた旗と星の入ったユニオンジャック」であった⁵⁰⁾。

サハライとボースという日本で活動するインド独立運動家たちからの直接の投稿であり、彼らはそれぞれインド選手団とも面識がある。特にボースが述べている、日本青年館屋上へのガンディー旗と英領インド旗の並置掲揚は『東京朝日新聞』や『東京日日新聞』とは違った事実を提示している。もう1紙、THE JAPAN ADVERTISERの記事も確認してみることにする。

(5) THE JAPAN ADVERTISERによる報道

THE JAPAN ADVERTISER⁵¹⁾では代表旗問題に関して5月23日、24日、25日、28日と記事を掲載している。代表旗問題の詳細に関しては日本の新聞(the vernacular paper)から引用をし、イギリス大使館とインド選手団関係者からのインタビューを載せている。5月22日の夜にTHE JAPAN ADVERTISERの記者が、インドの関係者(the Indian officials)に電話でインタビューを行った。インドの関係者は「国旗事件についていかなる返答をも拒絶」するが「インド選手団は極東大会に政治家としてではなく、スポーツマンとして参加している」とのみ声明を述べた。またイギリス大使館側のコメントとして「インドチームがインドを出発するときに副王より国旗を与えられた。この旗はインド旗〔ガンディー旗〕ではなく副王旗〔英領インド旗〕である」とする主張も併せて載せている⁵²⁾。また24日の記事ではインド選手団が東京に到着後に、在日インド人の集団と接触を持ったこと、そして「ガンディー旗はインド愛国者たちの寄付であった」ことを報道している⁵³⁾。翌日25日の記事では、イギリス大使館の声明として「新聞紙上でのインド国旗〔ガンディー旗〕が日本青年館に掲揚されたというのは

全く根拠のないことだと理解している」ことを載せたがその記事の続きでは「日本青年館を除く〔極東大会が行われる〕いかなる場所にも副王旗が揚がっている。青年館には2つの旗が連続的に留められている、副王旗と赤緑白のガンディー旗である」と英領インド旗とガンディー旗の両方が青年館の屋上に掲揚されていたとしている⁵⁴⁾。

2紙の英字新聞における国旗事件の報道は、関係者へのインタビューや投稿が掲載された。そして『東京朝日新聞』や『東京日日新聞』が出した英領インド旗のみを使用するという決着ではなく、英領インド旗とガンディー旗が並置掲揚されていたという状況を提示している。ここで外交史料館に残される代表旗問題の史料に注目したい。1930年5月27日付の報告の中で「〔日本青年館の屋上に〕「ユニオンジャック」ニ印度国旗タル紅白緑三色ヲ表シタルモノヲ添付掲揚シ居レル趣ノ処⁵⁵⁾」との一文がある。日本青年館の屋上には英領インド旗とガンディー旗が並置され掲揚されていたという報告がなされているのである。つまり英字新聞が報道するように、一度降納されたはずのガンディー旗は青年館の屋上に再度掲揚され、英領インド旗と並べて掲揚されていたのである。なぜガンディー旗と英領インド旗は並置掲揚されたのか。代表旗問題には、これまでに確認した新聞報道の中では登場しなかったある第3者が存在し、事件に大きく関わっていた。その内容については『日本』が詳しく報道しているので、最後に『日本』による報道を確認する。

(6) 『日本』による報道

1930年当時、『日本』⁵⁶⁾では在日独立運動家であるボースによるコラムが、月に2、3回のペースで掲載されていた。その主たる内容は、インドの現状とインドの独立の正当性を唱えるものであった。このことから『日本』にとってインドの独立に関連する問題は関心の高いトピックであったと考えられる⁵⁷⁾。そして5月23日付で代表旗問題の記事が初登場する。前出の*THE JAPAN CHRONICLE*でガンディー旗を掲げた要因を、

同じ植民地であるフィリピンが自らの国旗を掲揚していたためにガンディー旗を掲揚したとするボースの経緯説明を確認したが、『日本』ではより具体的に代表旗問題の経緯が述べられている。インド選手団の国旗に関してはイギリス大使館との間で「数度打合せを遂げて開会式等公式の場合は国旗はユニオン、ジャック国歌は御馴染の『ゴッド、セーブ、ザ、キング』を」使わなければならなかったが「普段は印度のナショナル、フラッグで良い」ということになり、「印度選手室は三色のナショナル、フラッグとユニオン、ジャックを並べ揚げるとか青年館屋上には三色を日、比、支三国々旗と並べて掲揚し」ていたが、イギリス大使館側から抗議が入り、問題へと発展することになったという⁵⁸⁾。

「普段は印度のナショナル、フラッグで良い」という言葉が、インド選手団にガンディー旗の日本青年館屋上への掲揚を実行させたことが窺うことが出来る。おそらく「普段」という言葉の解釈にイギリス大使館とインド選手団の間で差異があったのであろう。そして2日後に掲載された『日本』による代表旗問題の報道は第3者による仲介のもと、並置掲揚という結果に至る。

ガンディー旗の降納と英領インド旗掲揚の結果、「在京印度人有志、ボース、サヴァルワル氏等が中心となつて」激しい抗議が行われていた。その最中、23日になると「日本国民党の国際部」が奮起し「フィリピン側はアメリカ国旗を掲げず堂々とフィリピンの国旗を掲げてゐるに拘らず印度選手の属する印度だけが自国の国旗を掲げず、英国のユニオン・ジャックを立てるが如きは東洋民族としての誇りを傷付けるもの」であるとして「八幡書記長、鈴木国際部長、花田青年部長、それに興国学生連盟の金子氏、印度青年K、Bシナ君の一行は」体協役員の郷隆のもとを訪れて「三色旗掲揚方を強硬に談判」した。その結果、国旗については「印度選手の意向を尊重する」と決定し、この話し合いの後「同代表者は」インド選手団監督ムカジーと面会をする。その後今度はムカジーが「夜十二時頃在京印度人某氏」

のもとを訪れて、「廿四日から三色旗を青年館楼上に立てると共に、選手及母国の参列者は明日の開場式当日三色の小旗を手にして出場すること」を確認する。極東大会開会式当日の5月24日朝には「ボース氏マツカーチ氏〔ムカジー氏〕及在京印度人等と日本青年館を訪れ印度の革命旗たるガンデー旗を数本持参し体協本部理事に面会しスタンド其他取付け容易なる箇所にはガンデー旗をも掲揚」を希望し、体協にも認められたという⁵⁹⁾。

『日本』は日本国民党⁶⁰⁾という第3者の関与を指摘し、並置掲揚という結果が日本国民党の尽力の結果だとしている。『日本』と日本国民党は、国家主義の確立、左翼思想の撲滅を目指し協力関係にあった⁶¹⁾。このことからガンディー旗の再度掲揚に関する報道は、事実と考えて差支えなからう。最終的に日本青年館屋上には、ガンディー旗と英領インド旗が並置掲揚されたのである。

英字新聞、そして『日本』による報道を確認することによって、代表旗問題は日本青年館への英領インド旗の掲揚で解決したわけではなく、在日インド人であるボースや、日本国民党などの尽力によって、英領インド旗と共にガンディー旗が日本青年館屋上に掲揚されたことが明らかになった。

以上の6紙を通して見えてきたのは、在日インド人達によるガンディー旗掲揚の強い主張である。時にはインド選手団に対して「今回の選手はいつでも印度国民議会のメンバーではないゆゑにたとへイギリス旗を掲げたところで抗議のしようがない」であるとか、「真のインドを代表するものと認むることができない」など、インド選手団に対して距離を置く発言をしている。だがインド選手団は、神戸でも東京でも在日インド人から歓迎を受け、日本滞在中に数度食事会にも招かれている。また詳細は後述するが、インド選手団もガンディー旗に対する特別な思いを持ち合わせていた。在日インド人とインド選手団の関係に関して、憶測を述べるなら、在日インド人によるインド選手団の批難というのは、あくまで国際スポー

ツ大会に参加しにきているインド選手団を巻き込むことを避けようとした一種のカモフラージュともとれるものではないだろうか。

こうして極東大会開催をむかえたインド選手団は、開会式においてある行動を起こすことになる。

5. 第9回極東大会開会式

1930年5月24日、明治神宮外苑競技場にて第9回極東大会の開会式が行われた。「晴れの大会開会式場に当てられた明治神宮外苑トラックのメインスタンドには、日章旗を初め遠来中華の青天白日旗、比律賓、インド四ヶ国の大国旗が中空高く翻り、スタンド中央の貴賓席にも、中央に日章旗を、其の両側には比島、中華、印度各国旗が張巡らされて、二千年の昔オリンピックの壮観も偲ばれる華やかさ⁶²⁾」の中、午前11時半から第9回極東大会開会式は行われた。入場行進は中国、フィリピン、インド、日本の順番で「忽ちスタンドから湧起る拍手の音は、外苑一杯に響き渡つて暫くは鳴りもやまず、早くも会場は興奮と熱狂のるつぼの中に巻き込まれ⁶³⁾」ていた。インド選手団は全員がターバンを頭に巻いて開会式に参加し、英領インド旗とリーフの様なもので丸かたどられ中央に「INDIA」と文字の入ったプラカードを持って入場した(写真1の左、右下)。他の国と違い、インド選手団だけがこのようなプラカードをしかも国名をも記して掲げていたのである。『中外商業新報』ではこのプラカードを「月桂樹の中央に濃青と赤の二線にインデアと書いた楯⁶⁴⁾」と説明しているが、『東京朝日新聞』は「入場式の旗は規則通りにユニオンジャックだが、標識は白、緑、赤のガンヂ旗を用いている」と報道している。つまりこのプラカードはガンディー旗を模したものであった。また大会中はインド選手団の応援に対しても「手に手に持つ小旗はいづれも三色旗」であり、英領インド旗を持つての応援はなかったようである(写真1の右上)⁶⁵⁾。またこの応援団の中には、ボースの姿も確認することででき、新聞でのインド選手団との

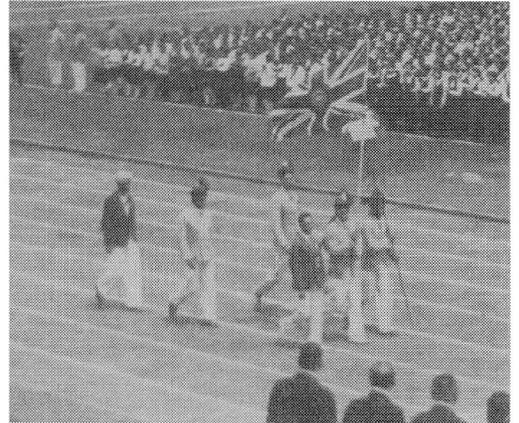
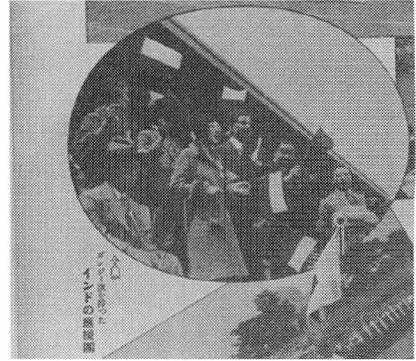


写真1. 開会式でのインド選手団と関係者の写真 (左・集合写真、右上・観客席の様子、右下・入場行進)⁷¹⁾



写真2. ボース (写真1左の拡大写真)

距離を置く発言が真意ではないことを窺わせる (写真2)。開会式で英領インド旗と共に、自分たちの母国を表す表記をプラカードに添付した彼らの行動は「立錐の余地もない⁶⁶⁾」程にスタンドを埋め尽くした大観衆の前で実行に移されたのである⁶⁷⁾。

開会式終了後、すぐに大会1日目が始まり、インド選手団も登場する。大会前の予想ではインド選手の実力は未知数であり、いわばダークホース的な立場であった⁶⁸⁾。結果は優勝や入賞を果たすことはなく、日本陸上競技連盟理事の上田清一は三段跳に出場したインド選手を見て、「未だ幼稚の様に思った⁶⁹⁾」と感想を述べている。

第9回極東大会期間中の5月29日、30日には、神宮外苑にある聖徳記念美術館で極東協会総会が開催された。この総会にはインド代表として監督のムカジーが出席した。総会では両日とも、各規

約についての加筆、修正が主な議題として上がり、選手権種目についての協議の中でムカジーはフィールドホッケーの選手権種目採用を提案している。インドの極東協会への加盟についてもやり取りがあり、フィリピン代表のJ・P・バルガスは「インドを第9回大会と同じように第10回極東大会に招待したい、そしてインドから多くの選手が参加し極東協会への加入を心待ちにしている」と加盟に関しては認めることはなかったが、第10回大会へのインドの参加を求めた。また第9回大会の名誉秘書であった薬師寺尊正からは「インドがわずかな人数ながら長旅を越えて極東大会に参加したことに、よきスポーツマンシップを見た」として感謝が述べられた⁷⁰⁾。

6. 極東大会終了後

5月31日に極東大会は閉会式を迎え第9回大会は終了した。閉会式では第9回大会会長である岸清一の閉会の辞の中で「印度は参加選手の人数甚だ少なきが為め、選手権を獲得するを得ざりしは遺憾千万なれど次回の大会には今回に比し一層多数の優秀なる選手を比律賓に送られ之に依つて、真に選手権争覇の実を揚げられんことを希望するものであります⁷²⁾」と4年後の1934年にマニラで開催される第10回大会には、インドからも多くの選手の派遣を希望すると語った。この間、インド選手団はボースらとの晩餐会に出席⁷³⁾、そして極東大会終了後に関西へと移動する。これは6月1日から2日間、南甲子園競技場で行われる日本学生・フィリピン・インド3国代表選手対抗陸上競技大会に参加するためであった。3国競技大会が終了後、インドへの帰国直前の6月4日にインド選手団は大阪英文毎日支局を訪問する。このときムカジーはこれまで発言を控えていた代表旗問題に対して、直接的に言及をし、その発言が*THE OSAKA MAINICHI & THE TOKYO NICHU NICHU*に掲載された。

日本の新聞が不幸とみなす東京でのインド国旗事件に対する様々な矛盾する報道が私の

注意を惹きました。私は関係者すべてに公平を期すなら、どの集団も私たちに強迫をかけることがなく私たちにいたずらをしてくることがないなら、私はこれに対して[国旗事件について]明らかにするべきであると思っています。東京のインド独立運動家がインド独立旗を強いたり、どんな種類の脅迫をしてきたことも正しいことではない。英国大使館が我々に強迫をしたというのも、同様に根拠のないことである。我々は様々な局面で、思いやりや援助、協力を受けました、このことに我々はすべての関係者に感謝します。私たちの選手団はインド選手団であり、我々は他のインド人が持つように多大な尊敬の念を国旗に持っています⁷⁴⁾。

新聞では声明文が掲載されただけであったが、この日のインド選手団の動きについて、兵庫県知事から内務、外務両大臣へ報告がなされている。そこには以下のような記述が残っている。

今般ノ大会会場ニ掲揚セシ印度国旗ハ駐日英国大使館ノ抗議ニ依リ掲揚スルヲ得ザリシモ吾々印度選手ハ印度民族ヲ代表渡来シタルモノナルヲ以テ此ガ表象ニハ英国旗ニ代ワル印度国旗ヲ以テテスキモノナル旨説ク所アリ⁷⁵⁾

帰国直前になってムカジーはガンディー旗こそ、インドの代表旗であることを主張し、一方で在日インド人や、イギリス大使館からの圧力を否定している。つまりムカジーは、ガンディー旗の掲揚はインド選手団が自発的に行った行動であると述べたのである。大阪英文毎日支局を後にしたインド選手団は、その後神戸より出航するプレジデント・ジョンソン号にて行きの航路と同じように上海を経由して帰国の途に着くのである⁷⁶⁾。

極東大会終了後の1930年7月、IOCにBOA(イギリスオリンピック委員会)から一通の手紙が届いた。内容は東京で開催された極東大会に参

加したインド選手団が英領インド旗に代わってガンディー旗を使用していたとして、IOCへの抗議の内容であった。IOCはこの手紙を受け取ると、実際に第9回極東大会でガンディー旗を使用していたかどうかをインドオリンピック協会と体協に確認した。インドオリンピック協会のG・D・サンディは国旗掲揚事件に対するBOAの抗議の内容に反論して「競技場、プール、バスケットコート、野球場そしてその他の装飾としても、英領インド旗 (the official flag of India) を使用していた。～中略～大阪での国際大会でそうである。」と返答を返した。サンディは第9回極東大会だけでなく3国競技大会においても、ガンディー旗は使われておらず英領インド旗が使われていたと主張した。一方、体協会長の岸清一も今回のインド選手団の国旗に関しては「体協、インド代表团、その他の国、そして英国大使館の間で満場一致で」英領インド旗の使用に決まっていたと返答している。サンディと岸清一の主張は大会中にガンディー旗は使用されていなかったことを一貫して主張した。この後BOAから再度抗議がくることはなく、極東大会で起こったインドの国旗を巡る問題は終結した⁷⁷⁾。

7. おわりに

以上の新聞報道を、外交史料館所蔵史料並びに『第九回極東選手権競技大会報告書』と照らし合わせつつ事実を整理すると、インドの極東大会参加の旅程及び代表旗問題は表3の時系列となる。結果として、事前の会議におけるインド選手団の極東大会中の使用国旗の決定や、イギリス大使館からの抗議があったにもかかわらず、ガンディー旗の掲揚に関しては体協役員の郷との話し合いにより日本青年館屋上での掲揚は容認された。また開会式ではガンディー旗こそ使用しなかったが、ガンディー旗を模したプラカードを持ってインド選手団は入場し、インドの応援者たちはガンディー旗の小旗を持って応援に駆け付けたのである。

ボースら在日本インド人にとって、英領インド旗

によってインド選手団を表象するというのは許しがたいものであった。彼らの立場はイギリス支配の打破、インドの独立であり、英領インド旗というイギリス支配を肯定する国旗の使用は認められるものではなかった。第9回極東大会が開催された1930年より以前に、ボースは日本、中国、インドが中心的地位を占めてアジアを先導していくべきという考えからなる「東洋人連盟」という構想を持っていた⁷⁸⁾。また1926年にボースらが尽力して開催された全亜細亜民族会議には、日本、中国、インド、朝鮮、フィリピン、インドから参加者があり⁷⁹⁾、このボース周辺の動きを極東大会という視点から見ると、日本と中国とフィリピンはすでに大会に参加しており、第9回極東大会にインドも参加することによって、アジア地域のみを対象とした国際スポーツ大会という舞台でボースの理想が現実化していると考えることが出来る。つまりボースの考えるアジアの一員としてのインドを示すためにも、ボースがそれまでに日本国内で数度行っていたガンディー旗の掲揚を極東大会でも実行する必要があったのではないだろうか。THE JAPAN ADVERTISERにも「彼ら [インド選手団] の問題を取り扱う準備が出来ている集団」として在日インド人の代表旗問題への関与は注意が払われており、ボースらにとって代表旗問題はスポーツを媒介としたインド独立運動の一端として見る事が出来よう。

ではインド選手団にとって、代表旗問題とはどんな意味を持つのか。青年館でのガンディー旗の掲揚だけでなく、ガンディー旗型のプラカードを携えた入場行進とはなんなのか。帰国直前のムカジーの発言からも確認できるように、インド選手団もガンディー旗こそインドを表象する国旗であると認識していた。またインドの独立も自明のものとして願うべきことであった⁸⁰⁾。しかし極東大会開会式で掲げられたのは英領インド旗であった。これは『東京日日新聞』で報道された様に、入場式では「自治領旗 [英領インド旗]」を使用することで合意をしているからである。ガンディー旗の掲揚が認められたのはあくまで青

表3. インド選手団と周辺の動き

月日(時間帯)	出来事	出典
5月7日	上海寄港	『東朝』『日日』
5月9日	門司到着	『東朝』『日日』
5月10日(午前10時)	神戸到着	『神戸新聞』
5月10日(昼)	神戸在住インド人と交遊	『神戸新聞』
5月10日(午後9時50分)	三宮駅から東京に向けて出発	『神戸新聞』
5月11日	東京到着(開催会場視察、その後乃木坂倶楽部に宿泊)	『アスレチックス』
5月12日(夜)	中村屋を訪問(ボースと面会)	『アスレチックス』
5月16日(午後6時半～8時)	極東大会部長会議開催(インドの国旗国歌が決定)	『極東大会報告書』
5月17日(夕方)	乃木坂倶楽部から日本青年館に移動、屋上にガンディー旗を掲揚する	THE JAPAN CHORNICLE
5月20日以前	英国大使館からの抗議によりガンディー旗降納され英領インド旗が掲揚される	『読売』
5月21日(午後3時)	帝国ホテルでの体協主催のパーティーに参加	『極東大会報告書』
5月21日(午後7時25分)	JOAKラジオにてムカジー演説放送	『極東大会報告書』
5月22日(午後1時)	在日インド人の抗議により英領インド旗降納	『東朝』
5月22日(午後3時)	上野精養軒にて田中文相主催のレセプションパーティーに出席	『極東大会報告書』
5月22日(夜)	ボース、サバルワルらによる抗議	『東朝』
5月23日	英国大使館とインド選手団会談 英領インド旗使用で合意	『日日』
5月23日	日本国民党国際部と郷隆による会談 インド選手の意向を尊重	『日本』
5月23日	日本国民党国際部とムカジーが会談	『日本』
5月23日(午後)	ボース声明「真のインドを代表するものと認むることが出来ない」	『東朝』
5月23日(深夜12時頃)	ムカジー、某インド人と会談、24日から日本青年館にガンディー旗掲揚を報告	『日本』
5月24日(朝)	日本青年館屋上に英領インド旗とガンディー旗が掲揚	『日本』
5月24日(午後1時)	極東大会開会式 英領インド旗とガンディー旗型のプラカードを持って入場	『東朝』『中外商業新報』
5月30日(午前11時)	ボースがインド選手団を中村屋に招待	JACAR: B0412509700 (第40画像目から)
6月4日	大阪毎日英文支局訪問 ムカジー声明「表象ニハ英国旗ニ代ワル印度国旗ヲ以テス可キモノ」	JACAR: B0412509700 (第45画像目)

※『東朝』=『東京朝日新聞』、『日日』=『東京日日新聞』、『読売』=『読売新聞』、『極東大会報告書』=『第九回極東選手権競技大会報告書』

年館屋上であり、インド選手団は開会式で英領インド旗を使用しなけりなかつた。ガンディー旗の使用が認められない状況下で、インド選手団はガンディー旗を模したプラカードを携え、英領インド旗と共に入場するという方法にでた。それはあくまでプラカードであり、旗ではない、しかしそこにははっきりと横しまの三色模様と「INDIA」という文字が描かれていた。これは、まさに許容範囲の中でいかに「インド」を表象すべきかというぎりぎりの行動であったといえ

よう。あくまでプラカードではあるが、ボースが「2つの旗」とコメントしたように、彼らにとってプラカードは旗と同義語であったのである。イギリス支配のインドとしてではなく「印度民族」の代表のプライドは堅持しながら、極東大会というスポーツの祭典に参加したインド選手団。その複雑に絡み合う思いを、開会式で掲げられたプラカードは表していると考えることができよう。インド選手団と在日インド人、この両者はそれぞれの思惑を抱きながら、英領インド旗ではなくガン

デー旗の掲揚を実行に移したのであった。

極東大会にとってインドの参加は、これまでも企図はされながら実現には至らなかった3ヶ国以外の参加を初めて果たすものであった。これは表面上「平和好意友愛」をアジアにもたらすものとして受け止められたが、実際には植民地からの脱却を図るアジアの現状をスポーツの場において噴出させるものであった。インド選手団、在日インド人、日本国民党、BOAと、代表旗問題を巡ってその対応に迫られた第9回大会の主催団体である体協、そして極東大会にとってインドの参加は、スポーツが独立運動の手段として利用されることを眼前で目撃し、同時代のアジア諸国を極東大会に参加させることによって生じる問題を思い知ることになったのである。

註および引用・参考文献

- 1) 1930年当時、英領インドはインド総督のもと現在のインド、パキスタン、バングラディシュ、ミャンマーを包括するイギリスの植民地であった。
- 2) 但し、中国女子代表選手団に関しては神田のYMCA会館に宿泊している。大日本体育協会編『第九回極東選手権競技大会報告書』1930年、p. 293。但し、中国女子代表選手団に関しては神田のYMCA会館に宿泊している。
- 3) つねを生「極東選手権大会 與太日記」『日本青年新聞』大日本青年連合、1930年6月15日、p. 7。
- 4) 「イギリス領インド帝国副王（総督）旗（Flag of the Governor-General of India）」と呼ばれるイギリスの植民地であったインドを表す旗である。荻安望『列強「植民帝国」旗章図鑑—旗から見える世界史500年』彩流社、2009年、p. 37。
- 5) 小林繁「極東選手権大会の日本スポーツに及ぼした影響」『四天王寺大学紀要4-5』1971-1972年、pp. 52-78。ABE Ikuo "Historical Significance of the Far Eastern Championship Games: An International Political Arena" 『筑波体育科学系紀要 第26巻 別冊』2003年、pp. 37-68。
- 6) 孫安石『極東オリンピックの政治学—「運動会」をめぐる日・中関係史の一側面—』富士ゼロックス 小林節太郎記念基金1996年度研究助成論文、1998年。伊達由美「極東選手権競技大会の世界—アジア主義的スポーツ観の理想と現実—」平井肇編『スポーツで読むアジア』世界思想社、2000年、pp. 205-224。何文捷「第10回極東選手権競技大会満州国参加に対する中国の反応」『体育史研究』16号、1999年、pp. 37-48。
- 7) 池井優「東洋“オリンピック”「満州国」参加問題」中村勝範『近代日本政治の諸相』慶応通信 1989年、pp. 29-52。
- 8) 高嶋航「極東選手権競技大会とYMCA」夫馬進『東アジア外交交流史』京都大学学術出版会、2007年。高嶋航「「満州国」の誕生と極東スポーツ界の再編」『京都大学文学部研究紀要』2008年、47号、pp. 131-181。高嶋航「戦時下スポーツの祭典—幻の東京オリンピックと極東スポーツ界—」『京都大学文学部研究紀要』2010年、49号、pp. 25-72。高嶋航『帝国日本とスポーツ』塙書房、2012年。
- 9) 極東大会には選手権種目とオープン種目の2つがあり、選手権種目に参加するためには加盟国の全会一致での賛成が必要であった。ただオープン種目への参加にはそうした規定はなく、開催地に在留する欧米人が参加することもあった。
- 10) 代表旗問題に関する記事、もしくは写真掲載を確認することが出来たのは以下の新聞である。『東京朝日新聞』、『大阪朝日新聞』、『東京日日新聞』、『大阪毎日新聞』、『読売新聞』、『国民新聞』、『都新聞』、『中外商業新報』、『神戸新聞』、『神戸又新日報』、『日本』、『日本青年新聞』、『THE JAPAN ADVERTISER』、『THE JAPAN CHRONICLE』、『THE JAPAN TIMES』

- & MAIL, THE OSAKA MAINICHI & TOKYO NICH NICH.
- 11) 大日本体育協会編『第五回極東競技大会報告』1921年、p. 142。
- 12) 形式上、極東大会は極東体育協会がその大会の運営を任されることになっているが、その実態は各国の全国的競技団体に運営を一任するのが現状であった。
- 13) 大日本体育協会編「彙報（極東大会準備に関するもの）」『第八回極東選手権競技大会報告書』1928年、p. 348。
- 14) 「極東大会に印度参加」『東京朝日新聞』1927年6月26日付朝刊、3面。
- 15) 前掲13、pp. I-VIII。
- 16) 前掲2、p. 275。
- 17) この移行による会議への出席メンバーに大きな変更はなく、おそらく形式上のものと考えられる。
- 18) 現在のコルカタを指す。
- 19) 前掲2、p. 278。
- 20) 同上、p. 281。
- 21) 「インドからも選手派遣決定の通牒」『東京朝日新聞』1930年5月3日付朝刊、7面。
- 22) 「インド選手一行上海寄港」『東京朝日新聞』1930年5月8日付朝刊、3面。
- 23) 「印度選手門司寄港」『東京朝日新聞』1930年5月10日付朝刊、3面。
- 24) “INDIAN OLYMPIC TEAM.” *THE JAPAN CHRONICLE*, SUNDAY, MAY 11, 1930.
- 25) 「見事な巨軀を示し 極東大会への初参加の印度代表選手通過」『神戸新聞』1930年5月11日付朝刊、7面。
- 26) 「印度選手門司寄港」『東京朝日新聞』1930年5月10日付朝刊、3面。“INDIAN OLYMPIC TEAM.” *THE JAPAN CHRONICLE*, SUNDAY, MAY 11, 1930.
- 27) THE NETHERLANDS OLYMPIC COMMITTEE (COMMITTEE 1928) *THE NINTH OLYMPIAD AMSTERDAM* *OFFICIAL REPORT* 1928、1928年、p. 387。
- 28) 「新たに印度選手を迎えて」『アスレチックス』第8巻第6月号1930年6月 p. 35。
- 29) 後年、織田はフィリピンで開催されたアジア大会でハミッドと再会する。その時ハミッドはパキスタン代表のコーチとして参加していた。織田幹雄『跳躍一路』日本政経公論社、1956年、p. 149。
- 30) 大日本体育協会編「歓迎宿舍部報告」『第9回極東選手権競技大会報告書』1930年、p.293。
- 31) 「平和好意友愛を東洋の諸国に招致す インド代表ムカーシ氏は語る」『読売新聞』1930年5月21日付朝刊、9面。
- 32) 「インド国旗国歌の件決定」『東京朝日新聞』1930年5月17日付朝刊、3面。
- 33) ここでいうインドの国歌に関して詳細は不明だが、おそらく現在のインド国歌を指すものではないかと考えられる。現在のインド国歌は、アジアで初めてのノーベル文学賞を受賞したR・タゴールの詩を採用したものであるがタゴールはベンガル出身であり、また1912年ごろにこの詩が誕生していたことから可能性は高い。K・クリバラニ著、森本達雄訳『タゴールの生涯』第三文明社、1981年、p.217。
- 34) R・B・ボース、A・M・サハーイの活動については中島岳志『中村屋のボース』白水社、2005年。長崎暢子「インド国民会議派の活動と日本—A・M・サハーイの回想録—」『東京大学教養学部人文科学科紀要(70) 歴史と文化』17号を参照。
- 35) JACAR : B02032185300 (第35画像目から)、英国内政関係雑纂／属領関係／印度関係／反英運動関係 (A.6.6) (外務省外交史料館)。「鎌倉義烈荘にインド国旗掲揚」『東京朝日新聞』1930年3月6日付夕刊、1面。「母国万歳」『東京朝日新聞』1930年3月13日付夕刊、1面。

- 36) 「ガンジ氏遂に捕縛さる」『東京朝日新聞』1930年5月6日付夕刊、1面。
- 37) 「神戸のインド人一斉に店舗を閉ざす」『神戸新聞』1930年5月8日付夕刊、2面。「ガンジー氏の解放に努力 在神の印度人たちが反英運動支持の協議」『神戸新聞』1930年5月9日付夕刊、2面。
- 38) イアン・ニッシュ「同盟のこだま」木畑洋一・イアン・ニッシュ・細谷千博・田中孝彦『日英交流史1600-2000 政治・外交Ⅰ』東京大学出版会、2000年、p. 273。
- 39) 前掲4。
- 40) SRIRUPA ROY “A Symbol of freedom”: The Indian Flag and the Transformations of Nationalism, 1906-2002 *THE Journal of Asian Studies* 65, no. 3 (August 2006)
- 41) 「英国旗掲揚に印度側憤慨」『東京朝日新聞』1930年5月23日付朝刊、3面。
- 42) 「在留インド人声明」『東京朝日新聞』1930年5月24日付朝刊、7面。
- 43) 「インド代表の国旗問題解決す」『大阪朝日新聞』1930年5月24日付朝刊、5面。
- 44) 「旗竿の嘆き」『東京日日新聞』1930年5月23日付朝刊、11面。
- 45) 「印度選手代表旗は自治領旗」『東京日日新聞』1930年5月24日付朝刊、7面。
- 46) *THE JAPAN CHRONICLE*は1899年にイギリス人のR・ヤングによって、神戸で創刊された英字新聞である。「其社説の厳正にして且鋭利なこと」との評価を受けていた。蛭原八郎『日本欧字新聞雑誌史』大誠堂、1934年、p. 173。また掛川トミ子「『ジャパン・クロニクル』ノート」東京大学新聞研究所編『コミュニケーション 行動と様式』1974年、pp. 249-286や鈴木雄勝「神戸英字紙界と日露戦争」上智大学コミュニケーション学会『コミュニケーション研究』、pp. 1-22を参照。
- 47) *THE JAPAN CHRONICLE*, TUESDAY, MAY 27, 1930, p. 4。
- 48) JACAR : B0412509700 (第40画像目から)、外務省記録／文化、宗教、衛生、労働及社会問題／文化、文化施設／極東「オリムピック」競技大会関係一件 (I.1.12.0.027) (外務省外交史料館)
- 49) “THE FLAG INCIDENT.” *THE JAPAN CHRONICLE*, MAY 28, 1930, p. 5。
- 50) “THE FLAG INCIDENT.” *THE JAPAN CHRONICLE*, JUNE 3, 1930, p. 5。
- 51) *THE JAPAN ADVERTISER*とは1890年に横浜でR・マイケルジョンという人物によって創刊された英字日刊新聞である。1933年には「米国のミズリー大学新聞賞」を受賞し、当時「不振の我欧字新聞界にとつて、珍しい刺激」であったという。蛭原八郎『日本欧字新聞雑誌史』大誠堂、1934年、p. 151、p. 232。
- 52) “OLYMPIC GAMES NOTE” *THE JAPAN ADVERTISER*, May 23, 1930, p. 3。
- 53) “OLYMPIC NOTES” *THE JAPAN ADVERTISER*, May 24, 1930, p. 3。
- 54) “OLYMPIC NOTES” *THE JAPAN ADVERTISER*, May 25, 1930, p. 3。
- 55) JACAR : B0412509700 (第40画像目から)、外務省記録／文化、宗教、衛生、労働及社会問題／文化、文化施設／極東「オリムピック」競技大会関係一件 (I.1.12.0.027) (外務省外交史料館)
- 56) 『日本』は「左翼思想撲滅の為」に東京帝国大学教授の上杉慎吉らによって創刊された新聞である。日本新聞社『日本新聞十年記念 日本精神発揚史』1934年、p. 35。
- 57) 『日本』には代表旗問題に関する記事は出てくるが、極東大会自体の報道はなされていない。
- 58) 「英国側の横槍から印度国旗のもつれ日本青年館の屋上から引き下されて一ト問題」『日本』1930年5月23日、3面。
- 59) 「青年館楼上に再び印度の三色旗 ポース氏や日本国民党的奮起で円満解決に告ぐ」『日

- 本』1930年5月25日、3面。
- 60) 西田税が中心となって1929年11月に結成された愛国無産政党である。堀真清『西田税と日本ファシズム運動』岩波書店、2007年、pp. 326-341。
- 61) 日本国民党について『日本』では、その成立や活動状況を逐一報せている。前掲56、p. 98、p.108、pp. 107-108。
- 62) 前掲2、p. 13。
- 63) 同上。
- 64) 「とりどりの入場ぶり」『中外商業新報』1930年5月25日付夕刊、1面。
- 65) 「スタンドから 極東競技大会きのふのスケッチ」『東京朝日新聞』1930年5月25日付朝刊、11面。
- 66) 前掲2、p. 13。
- 67) 『アサヒグラフ』では、ガンディー旗を持って応援するボースの姿が確認できる。『アサヒグラフ』343号、1930年6月4日、p. 5。
- 68) THE JAPAN CONTEST COMMITTEE Far Eastern Athletic Association *Official Report of the NINTH CHAMPIONSHIP GAMES of the FAR EASTERN ATHLETIC ASSOCIATION* 1930年、p. 60、p. 76。
- 69) 前掲2、p. 41。
- 70) 前掲68、p. 236。
- 71) 写真左・『日本体育協会資料室89第9回極東大会(2)』公益財団法人日本体育協会・資料室所蔵、写真右上・『アサヒグラフ』第40巻第23号、東京朝日新聞、1930年6月4日、写真右下・大日本体育協会編『第九回極東選手権競技大会記念写真帖』1930年5月。
- 72) 前掲2、p. 274。
- 73) JACAR : B0412509700 (第45画像目)、外務省記録／文化、宗教、衛生、労働及社会問題／文化、文化施設／極東「オリムピック」競技大会関係一件 (I.1.12.0.027) (外務省外交史料館)
- 74) “Mukerjee Clarifies Indian Flag Issue at F.E.C.G.” *THE OSAKA MAINICHI & THE TOKYO NICHU NICHU*, OSAKA, JUNE 5, 1930 p. 3。
- 75) JACAR : B0412509700 (第13画像目)、外務省記録／文化、宗教、衛生、労働及社会問題／文化、文化施設／極東「オリムピック」競技大会関係一件 (I.1.12.0.027) (外務省外交史料館) ※昭和5年5月7日付の書類だが、インド選手団の帰国に関する報告であり5月7日ではインド選手団が来日する前の話になってしまうので、日付に関しては誤りであると推測する。
- 76) 同上。
- 77) ABE前掲5、p. 52。
- 78) 中島岳志『中村屋のボース』白水社、2005年、pp. 164-168。
- 79) 同上、pp. 178-194。
- 80) ムカジーはパーティー等に出席すると、演説の度に「悲壮な調子を帯びて東洋民族の協力を叫び、印度に対する援助を乞ひ」ていた。その言葉は「席上の若き選手達の胸を抉るもの」があったという。「揚げたり降したり国旗問題いきさつ 熱情ほとばしる印度選手たち各席上でもさけぶ」『国民新聞』1930年5月23日、7面。